

清流

題字：芳野 充

令和7年2月28日

第98号

発行所 加来不動産(株)

発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに

静かに

清流のように

人間関係を良好にする、大切なこと

味わい深い人生、いまが幸せだと思える人生にするためには、人間関係がおおしく影響する、ということを感じて痛烈に実感したのは、わたしが三十二歳のころです。そのころのわたしは、社員や妻との関係がお世辞にも、良いとは言えませんでした。その要因は、わたしのいたらない点は棚に上げ、相手の粗を探しては「あの人はイヤな人だ」と決めつけ、相手を責めていたからです。そうなるとう当然、人間関係は良くなるはずがありません。

人間関係が悪化するとどうなるか。わたしの場合はまず、精神的にダメージを受けました。そうすると次には、それが体調にあらわれ、胃痛やめまい、片頭痛や吐き気をもよおしたりすることも珍しくありませんでした。わたしがそのときサラリーマンだったら、まよわず退職の一択です。経営者という立場のわたしに、その選択肢はあり得ませんでした。しかし、その逃げられない環境が「人間関係を大切にすることへの意識をうながすきっかけになったことは間違いありません。」ことへの意識

良好な人間関係を築くために、いまも大切にしていることが四つあります。そのレベルはまだ決して高くはありませんが、まどめてみます。

一つ目は「人生の師をもつ」こと。自分のせまいた見や価値観で色々と考えをめぐらしても、無意識に自分の都合のよい方向に考え、相手を悪く思ってしまうのが我々人間ではないでしょうか。そんなとき、客観的かつ的確なアドバイスをしてくれる人生の師がいることで、今でも自分の至らなさに気づかされます。

二つ目は「座右の書をもつ」こと。「座右の書」とは、かんたんに言えば、自分が落ち込んだときや迷ったときに、勇気や元気をもらえる。あるいは、正しい道に立ち返ることができる本のことです。人生の師がいても、物理的または時間的にすぐに会えないこともあるなかで、座右の書をもつことは人間関係を良好にするために、欠かせないものだと思います。

三つ目は「知行合一」です。これは二つ目にも関連しますが、大切なことを本などで知ったとしても、行動にうつさない限り自分が成長することはありません。人に不快さを与える行動がどんな行動なのか。あるいは安心やよろこびを与える行動がどんな行動なのかを知らなければ、それを行動にうつしていく、ということの大切さを実感します。

四つ目は「静かな時をもつ」こと。仕事のこと、会社や家族・親族との人間関係。体調やお金、将来のことなど様々な問題で感情がゆれ動きます。ついつい目の前のことでまわりが見えなくなるときがあります。だからこそ、一日のなかで心を整える静かな時間をもつこと。そうすると落ち着きをとりもどし、おだやかに相手とやり取りできる場面がふえてきたように感じています。

加来 寛

